胃食道逆流はカプサイシン咳感受性を亢進させる

新潟県立加茂病院内科　藤森勝也、江部佑輔
新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学　下条文武
新潟大学医歯学総合病院医科総合診療部　鈴木栄一

【背景】気管支喘息では、胃食道逆流を合併している症例がみられる。咳喘息でも同様な頻度で、胃食道逆流が合併している症例がみられることを報告してきた。咳喘息では、咳感受性が亢進している症例と亢進していない症例がみられる。

【目的】遷延性・慢性咳嗽で、胃食道逆流と咳感受性との関係を検討する。

【対象と方法】胸部単純X線写真正常の3週間以上続く乾性咳嗽を対象にした。胃食道逆流の診断はQUEST問診票4点以上とした。カプサイシン咳感受性試験は、10段階（1.22μM-625μM）に希釈したカプサイシンの低濃度からの吸入により、咳が5回以上誘発された最低濃度を咳閾値（C5）とした。検査前12時間以上、すべての薬剤の使用を禁止した。

【結果】遷延性・慢性咳嗽36例で検討できた。咳喘息32例、アトピー咳嗽1例、胃食道逆流による咳嗽2例、咳払い1例であった。男11例、女25例、年齢53±18歳。QUEST問診票で4点以上は、15例、42%にみられた。QUEST問診票の点数とlogC5との間には、有意な負の相関関係を認めた。QUEST4点以上は、4点未満に比して、有意に咳感受性は亢進していた。

【まとめ】遷延性・慢性咳嗽で、胃食道逆流と咳感受性は関連する。